

紫式部集32—35番歌についての考察

——「文散らし」をめぐる——

渡 辺 健

『紫式部集』において、紫式部の夫・宣孝のぶたか関係の歌は34首と

最も数が多く、家集編纂時における式部の問題意識の大きさを示している。この家集は、56歌と57歌との間を境として、大きく前半と後半に分けることができるのだが、その前半部では、宣孝の求婚・結婚生活・死後の哀傷など、時間の経過に沿って宣孝との交渉のあらましがたどれる構成になっている。このことから、家集内部における宣孝関係歌の配列意図の一端が窺われるが、そのようにして家集の配列に従い、二人の交渉をたどっていくと、32—35の四首の贈答は、特に印象的な事件として読者の目に映る。

もとより人の女をを得たる人なりけり。

文散らしけりと聞きて、「ありし文ども取り集めておこせずは、返り事書かじ」と、言葉にてのみいひやりたれば、みなおこすとて、いみじく怨うらじたりければ、正月十日ばかりのことなりけり

32 閉ちたりし上の薄氷うすこり解けながらさは絶えねとや山の下水

すかされて、いと暗くらなりたるに、おこせたる

33 東風こちかぜに解くるばかりを底見ゆる石間いしまの水は絶えば絶えなむ

「今は物も聞こえじ」と、腹立ちければ、笑ひて、返し
34 言ひ絶えばさこそは絶えぬなにかそのみはらの池をつつみし
もせむ

夜中ばかりに、また

35 たけからぬ人かずなみはわかへりみはらの池に立てどかひ
なし

この贈答歌群は、28—31の、宣孝が式部に求愛していた頃の歌群に続くもので、二人の婚姻が成立して間もないころのものと思われる。贈答の時期は、詞書に「正月十日ばかり」とあるのを、暦日によって長保元年（九九九）正月十二日以降同月中旬のことと算定する木船重昭氏の説に従う。式部と宣孝の結婚については諸説あるが、家集から推察するところでは、長徳三年（九九七）立春に、父・為時の赴任に従って越前に下向した式部の許に、宣

孝から求愛の文が寄せられ（28歌）、以後二人の間に交渉が続いて（29―31歌・74・75歌。なおこの間に式部帰京）、長徳四年冬に婚姻が成った（76歌はその直前のもの）と考えるのが、現在最も妥当な見解であると思われる。

この婚姻成立時、二人の年齢は式部25歳、宣孝49歳と推定されていて、父娘ほどの年齢の開きがある。また宣孝は、『尊卑分脈』によればすでに三人の妻を持ち、それぞれに子を儲けている上、家集29の詞書に「近江守の女懸想すと聞く人」と紹介されているように、浮薄な性向の人物であった。それゆえ式部は、32の詞書で「もとより人の女を得たる人なりけり」といつているように、夫となる人の女性関係に不安を残しながらの結婚であった。

したがって、「文散らしけりと聞きて」に始まる出来事は、式部がかねてから抱いていた結婚への不安が、現実になったものといえる。ただ、従来の研究では、この一件の深刻さを一方では認めながらも、この贈答を痴話喧嘩的なものと見たり、そこに遊戯性を指摘するむきが多かった。確かに、二人の間に交わされた歌だけを問題にする限り、そのような解釈も首肯しうるのであるが、「意気の合った夫婦間の趣向とか手練手管の応酬」や、「歌合戦」といったような位置付けには、やはり疑問が持たれる。そこで本稿では、「文散らし」に関する当時の用例をできるだけ参照しながら、式部にとってこの贈答の一件がどのような意味を持っていたのかを探っていきたい。

この贈答が単なる遊戯性で片付けられないことは、宣孝が式部からの文を「散らし」たと聞いての、式部の反応に窺われる。「散らす」とは、「誰彼に口外する。言いふらす」という意味で、ここでは宣孝が式部からの文を他人（おそらく他の妻たち）に見せたから、式部が怒ったのであろう。しかし、「ありし文ども取り集めておこせずは、返り事書かじ」というのは、相当な怒りで、絶縁を宣言するにも等しい抗議である。

なぜなら当時、恋人からの文を相手に返却するのは、一般に、二人の仲が絶える際に行われることであった。

師賢朝臣¹⁰もの言ひわたりけるを、絶えじなど契りて後も
また絶えて年ごろになりければ、通はしける文を返す
とて、その端に書きつけてつかはしける 式部命婦
行く末をながれてなにに頼みけん絶えけるものを中川の水

（後拾遺集・雑二）

右大臣、住まずなりにければ、かの昔おこせたりける文
どもを取り集めて返すとて、詠みて贈りける

典侍藤原因香朝臣¹¹

頼めこし言の葉今は返してむわが身ふるれば置き所なし

返し

近院¹²右大臣

今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む

(古今集・恋四)

先々通はせたまひける御文とて、今は返したてまつれ
たまふとて、御息所

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返すまざ
れり (元良親王集)

このような用例から、新婚間もない時期に、夫に対してそれま
での文を返却するよう要求することの異様さが理解されると思う。
なお、『源氏物語』『浮舟』巻には、薫からの文を宛先違いを装っ
て返却した浮舟に対し、乳母の右近が、「殿の御文は、なぞで返
したてまつらせたまひつるぞ。ゆゆしく、忌みはべるなるもの
を」と諫める場面がある。不吉で差し障りのあることと聞いてお
りますのに、というのだから、恋文を返すのは、やはり当時では
タブーと考えられていたと思われる。こうしたことから、式部
が、文の返却を求める自分の行為の意味を知らなかったはずはな
いであろう。

また、式部が宣孝に、「言葉にてのみいひやりたれば」と、口
頭のみで抗議の旨を伝えさせていることの意味も重要である。こ
れは大野晋氏のいわれるように、「歌を書いて送れば、『これまで
の手紙をすべて返せ』といつてやる主旨に反する」からだけでは
なく、南波浩氏のいわれるように、「当時においては、消息を付
けず、使いの者の口上だけで伝達するというような行為は、無礼
な仕打ちであり、冷淡さを表わすものであった」ことも、式部の

意識にあったと思われる。

南波氏も指摘されているが、このことに関しては、『源氏物語』
「若菜上」の次の場面が参考になる。

女三の宮との結婚第三夜、宮と臥している源氏の夢に、紫の上
が現れる。源氏は驚き、鶏が鳴くのを待って急ぎ退出するが、紫
の上は帰ってきた源氏に打ち解けない。源氏はその日、終日紫の
上の機嫌を取り繕っているうちに、夜になっても宮の許へは行け
なくなってしまった。源氏は宮に、「今朝の雪にこちあやまり
て、いとなやましうはべれば、心やすきかたにためらひはべる」
と、参れない由の消息を送る。それに対して、宮の乳母は、「さ
聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり」とある。源
氏の見え透いた言い訳への反発であろうが、乳母の札を失した振
舞に、源氏は「異なることなの御返りや」、そつけないご返事も
あったものよ、と不快に思ったのである。

したがって、式部が宣孝に文の返却を、しかも口上で要求した
のは、二重の意味で非礼に当る。しかし、式部がこのように非常
識な行動に出たのは、決して思慮分別がなかったわけではなく、
そうすることによってまず自分の怒りの所在を強く訴え、次に宣
孝の反省を促したいという意図があったものと思われる。絶縁も
辞さず、という態度であるから、これは相当強い抗議であった。

ところで、当時、恋文が当事者以外の者に読まれることがなかったわけではない。

当時の日記や物語、私家集の類を見ると、男から女への恋文を結婚に発言権を持つ女の親（あるいはその親代り）が見るのは普通のことであつたし、また女君付きの女房が、男から女君への恋文を見たり、時にはその返事を代筆したりというのも、よくあつたことである。

ただ、女から男への文を、男が他の女（妻ないし愛人）に見せる場合となると、少し事情が違ってくる。男の妻同士が顔を合わせることもない当時、文は書き手の人柄や教養を判断させる材料になるから、文を見る側の女は、見られる側の女よりも優位に立つことになるといえる。そこには、次に見るような男の思惑が働くこともあつたようである。

異女の文を、妻の「見む」と言ひけるに、見せざりければ、怨みけるに、その文の裏に書きつけてつかはしける
よみ人しらず

これはかく怨み所もなきものをうしろめたくは思はざらん
(後撰集・恋二)

この例では、男が愛人からの文を見せなかつたので怨んだ妻に対し、男はその文の裏に歌を書き付けて与えた、とあるから、も

ちろん妻はその文の中身を見たのであろう。男の歌は、この文はあなたが怨みに思う筋合のものではないから、不安を覚えないでほしい、と愛人の存在に嫉妬する妻をなだめるものである。ここで男が愛人の文を見せたのは、妻に対して秘密を持たない意志を示すとともに、他人の文を見ることによる心理的なうしろめたさを利用して、巧妙に妻の嫉妬を押さえようとする思惑もあつたのであろう。

これと似た例として、『源氏物語』「霽標」「松風」巻で、源氏が紫の上に明石の君からの文を、完全には見ないが、見える場面を挙げる事ができる。明石から帰京後の源氏は、ますます紫の上への愛情が増して、他の妻たちの許に通うことも少なくなる。紫の上がいつも側にいるので、源氏は明石の君からの文も隠すことができず、紫の上にとそれとなく見せる。「霽標」では宛名だけを見せ、「松風」では文を広げたまま、紫の上の見るにまかせる。これが源氏のジェスチュアであることはいうまでもないが、そこには、二人が秘密のない仲であることを示し、紫の上の嫉妬をなだめる意図があつたと思われる。

ここで宣孝の場合、式部の文を他の妻たちに見せた意図は、家集の記述のみからは明らかにしがたい。ただ、式部の知らないところで、筆者が先に述べたような事情があつたことも、一つには想像される。

またもう一つには、宣孝はそうすることで、自分の虚栄心を満

足させた、という側面もあったことが想像できる。式部の文は、婚前の交際の頃のものと思われるが、前述した、宣孝が求愛していた頃の歌群28—31によって、それを見ていきたい。

28歌は、長徳三年（九九七）立春、越前の国府にいた式部の許に、宣孝から「春風に氷が解けるように、あなたもそろそろ私に打ち解けてもいい時期だ」と言ってきたのに対し、式部が「春なれど白嶺（しらね）のみゆきいやつもり解くべきほどのいつとなきかな」と、突き放すかのような態度で答えたものである。29歌では、式部に求愛する一方、近江の守の娘にも言い寄っていた宣孝が、「私に二心はない」と再三言い送るので、式部は「みづうみに友よぶ千鳥ことならば八十の湊に声絶えなせそ」、同じことならあちこちの女性に声をかけ回ったらいかが、と皮肉っている。30歌は、海人が薪を伐り出して積み上げ、海辺で塩を焼く絵を描いて宣孝に見立て、「よもの海に塩焼く海人の心からやくとはかかるなげきをやつむ」という歌を添えて贈ったものである。歌の裏の意味が、宣孝の浮気心を揶揄するものであることはいうまでもない。31歌では、文の上に朱をばたばたと垂らして、「私の涙の色を見てください」と訴えた宣孝のせつかくの趣向も、「くれなゐの涙ぞいとうとまるるうつる心の色に見ゆれば」と、あっさり切り返されている。

紙幅の関係で、式部歌の技巧については言及できなかったが、このように見てくると、宣孝が式部の才気あふれる歌や趣向

を、他の妻たちに自慢しなくなったことは想像できる。『相模集』を見ると、男が相模の文を他人に見せたり、その歌稿を持ち出したりした事実があったことが分かるが、これは相模の歌人としての名声によるものである。宣孝も、見せて自分が恥をかくような文なら、他人に見せたりはしないだろうから、「文散らし」が式部の才能を高く評価していたことによる行為との可能性も指摘できる。

4

しかし、このようにして他人に文を見せられた女の側の嘆きや屈辱感は、想像に難くない。彼女たちの中には、胸一つには余る思いを、歌に託して男に訴える者もいた。

人のもとに文つかはしける男、人に見せけりと聞きて、

つかはしける （よみ人しらず）

みな人に文見せけりな水無瀬河（みなせ）そのわたりこそまづは浅けれ

（後撰集・雑三）

この例は、自分の文を他の女に見せた男の心浅さをなじったものである。また『相模集』には、「人の知るべきにもあらぬことを、残りなく文よりはじめて頭（かぶ）はすと聞く人に、懲りずまに取り寄せて、宵居（よぐい）の手習に書きつくる」との詞書で、「いかにせむ葛の裏吹く秋風に下葉の露の隠れなき身を」以下、初句と第五句をそれぞれ「いかにせむ」「隠れなき身を」で統一した一連の歌九首

がある。

しかし、女の側からのこのような訴えを、男がまともに取り合うことは、まずなかったようである。

いかなることか聞きけむ、人のもとより

あだにさは散りける言の葉につけて人の心を嵐とぞ見る

返し

あだにまだ散りも慣らはぬ言の葉を嵐の風によそへざらなむ

(範永集)

文どもあだあだしう散らすと聞きし人を、本意^{ほんい}なしと怨

みたりしかば、かれより

常盤山露ももらさぬ言の葉の色なるさまにいかで散るらむ

返し

色変へぬ常盤なりせば言の葉を風につけても散らさましやは

(相模集)

女から怨まれて、素直に反省するほどの男なら、最初から文を他人に見せたりなどしないであろう。こうした用例を見ても分かるように、男はあるいはしらを切り、あるいは開き直り、といった態度で女に応じている。

紫式部の場合も、文を返せとの式部の抗議に対し、宣孝は開き直って「みなおこす」と、その通りにしてきた。しかも、「いみじく怨じたりしかば」とあるから、おそらく怨み言を連ねた文を添えていたのであろう。

式部の、「ありし文ども」返り事書かじ」という言葉は、裏返せば、自分の文が返却されたら宣孝に返事を書くということになる。しかし、絶縁が成立してからの返事はありえないから、式部の言葉は明らかに矛盾している。宣孝はそれを逆手にとつて、こちらは絶縁しても結構と居直り、式部に揺さぶりをかけてきた。結局式部が、「返り事書かじ」の前言を自ら違えて歌を贈ったのは、宣孝の加えた圧力に屈したことを意味するといえる。

鈴木日出男氏も指摘されているが、ここで通常の男女間の贈答歌の場合とは異なり、式部の方から宣孝に歌を詠み贈っていることに注意したい。28—31の式部歌がみな、宣孝への返しであると考えられるのに、なぜ新婚間もないこの時期に、式部が宣孝に歌を贈らなければならなかったのか。そこには、一度はただことば(日常語)で、怒りを包まずに伝えたことが宣孝の態度を硬化させた以上、歌によってでなければ、宣孝の心を、自分につなぎとめることはできないとする式部の判断があったのだらうと思われる。

式部が宣孝に贈った32歌は、「二人の間の淡い隔たりが解け、ひそかに愛情を交わすようになったのに、それでは二人の仲も絶えてしまえとおっしゃるのですか」という意味である。文を返せと強硬な姿勢だった式部も、ここではすっかり折れて、宣孝に和解を求めようと下手に出ている。その態度に宣孝は「すかされ(機嫌を取られ)」て、「いと暗うなりたる」頃に歌を返してきた。

おそらく式部は、それまで心を焦られながら待っていたであろうから、今夜の訪れがないと分かりきった時間に届いた文には、安堵とともに落胆もあったに違いない。

33の宣孝歌は、「打ち解けていたのは私ばかりで、あなたの愛情は底が見えたから、あなたとの仲など絶えるなら絶えてしまっても構わない」というものである。責任転嫁もはなはだしい、といったところだが、こうして宣孝が返歌を贈ってきた以上、最悪の事態は回避されたわけである。「今は物も聞こえじ」とあるのは、おそらく宣孝が33歌に添えた付言で、「腹立ち」とはいっても言葉の上での演技に過ぎない。というのは、「もう何もいわない」といながら返事を贈ってくるのは、「返り事書かじ」といえないからである。

式部が「笑ひて」とあるのは、この拗ねた子供のようなポーズがおかしかったのであろう。式部が34歌で、先程とは打って変わった態度を示しているのも、このように宣孝が式部に、歌で切り返す余地を残しているからである。「もう何もいわない、絶交だとおっしゃるなら、その通り絶交するのがよろしゅうございましょう。あなたがお腹立ちだからといって遠慮などするのですか」。このように、絶交の責任を相手に転嫁するのは、式部が宣孝の遣り口をそのまま真似たのであろう。今度はこちらの分が悪くなつたと見た宣孝は、「夜中ばかり」、夜更けに返歌を贈る(35歌)。

「立派でもない、人数にも入らない私は、いきりたつて腹を立ててみても、何の甲斐もないことです」。宣孝は、滑稽を装った降参のジェスチャーによって、事態の收拾をつけている。

5

ここでの宣孝の対処の仕方には、①式部の抗議に対し、その意図を逆手にとつて応じる構えを見せている点、②式部の和解に應じる文を届ける時間を遅らせている点、③自分を卑下し、降参を装って事態の收拾を図った点など、不自然なまでの余裕を指摘できる。また、一件の発端となった宣孝の行為の問題が閑却され、式部は自ら折れて和解を求めた手前、それを再度追及できないようになっている点にも、意図的なものが感じられる。

これらのことから判断すれば、宣孝の「文散らし」の意図は、他の妻たちの機嫌を取り繕うとか、自分の虚栄心を満足させるというより、他ならぬ式部に向けられたものだったと思われる。だとしたら、宣孝はなぜこのようなことをしたかということになるが、それには、次に挙げる『蜻蛉日記』¹⁵の例が参考となるのではないだろうか。

道綱母が兼家と結婚した翌年のこと、二人の間には八月末に男子が生れ、その頃の兼家の愛情は細やかであるように見えた。だが九月のある日、彼女は兼家が置き忘れていった文箱の中から、他の女に宛てた恋文を発見してしまう。彼女は思いがけないこと

に呆然とするが、せめて見たことだけでも知らせようと、文の端に歌を書き付ける。それは、「うたがはしほかに渡せる文みればここやとだえにならむとすらむ」と、兼家に新しい通い所ができて、訪れが途絶えることへの不安を形にしたものであった。果して十月の末頃、兼家が三夜続けて訪れないことがあったが、兼家は結婚のことは口に出さず、平気な顔でいる。しかしある日の夕方、彼女の許を辞去する兼家の様子が不審なので、彼女は召使に後をつけさせると、兼家の車は「町の小路なるそこそこになむとまりたまひぬる」ということであった。彼女はこれによつて、兼家の新しい通い所が、町の小路に住む女であったことを知るのである。

この経緯を見る限り、兼家が彼女の許に文箱を置き忘れたのは、偶然とは思われない。兼家には、後に結婚することになる愛人の存在を、事前にそれとなく知らせようとする意図があったのだから。そこに出産して間もない彼女への配慮が窺われるが、一方では、文を盗み見たことによる罪悪感を利用して、巧妙に彼女の嫉妬を押さえていることも知られる。

宣孝の「文散らし」には、兼家が道綱母に巧妙に愛人の存在を受け入れさせたような事情があったのではないだろうか。式部に熱心に求愛していた宣孝は、婚姻が成立してからも、愛情を示そうと、しばらくの間は夜離れなく式部の許へ通っていたと思われる。だが、前述したように、すでに三人の妻があった宣孝として

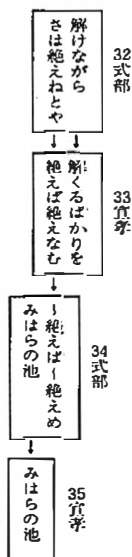
は、新しく加えた妻を、いつまでも特別扱いすることは無理だったに違いない。元の妻たちの忍従にも限度があらうし、やがて式部への訪れが少なくなることは、はっきりしていたと思われる。

そこで宣孝は、なるべく早い段階で、この事実を式部に受け入れさせる機会を窺っていたのだろう。そのために、わざと式部からの文を他の妻たちに見せ、噂を聞いた式部が逆上して抗議してくる言葉尻をとらえて、自分にとって式部は数ある妻のうちの一人にすぎないから、絶縁も構わないとの認識を示したのであらう。宣孝はこのことによつて、式部に巧妙に一夫多妻の現実を押し付けたのである。それは有無を言わせぬやり方に見えるが、夜離れが避けられないのであれば、後になって愛情の衰えからそうなつたと解釈されるよりは、この方がよいとの判断があったのかも知れない。また宣孝は、決して式部を精神的に追い詰めているわけではなく、式部を笑わせたり、歌によつて切り返す余地を残す配慮も忘れていないのである。¹⁷

式部としても、この宣孝の裁量は認めるしかなかったであらう。ただ、28—31の歌のやりとりに見られるように、式部を一人の人間として対等に扱ってくれていると信じていた宣孝に、急に裏切られた思いはあったに違いない。32歌の詞書に、「もとより人の女を得たる人なりけり」とあったのは、自分にとって宣孝はただ一人の夫であるのに、宣孝にとって自分は数ある妻のうちの一人に過ぎなかったことを、この一件で現実として思い知らされたこ

とへの嘆きを示唆していると思うのである。

さて、今まで「文散らし」の一件が、式部にとってどのような意味を持っていたのかを考察してきた。そこでは、家集の記述が簡潔に過ぎるのと、式部の立場の反映であるため、「文散らし」に関する当時の用例をできるだけ参照しながら、式部・宣孝双方の立場に照明を当てるよう努めた。その結果からいえば、筆者は通説のように、この贈答歌群を痴語喧嘩とか遊戯性といった観点だけでとらえることはできないのである。



確かにこの贈答歌群は、ここに図示したように、歌ことばの上では対応しているように見える。だがそこには同時に、二人の仲が絶える絶えないに執着する式部（34歌）と、そこから問題をそらそうとする宣孝（35歌）という構図も読み取れる。これは結局筆者が先述したような、二人の結婚に対する姿勢の相違を浮かび上がらせているのであり、そこでは、贈答以前の感情の齟齬が、そのまま贈答の場にも持ち越されているのだといえよう。

鈴木日出男氏はこの贈答歌群について、「二人の心の絶望的な

距離をかたどつたものとされるが、そこまでいかなくとも、式部にとってこの贈答が、おたがいの愛情を確認しあう行為からほど遠かったことは、容易に察せられる。そして、ここで式部が宣孝の真実の愛情を確かめえない事情は、家集後半部で語られる宣孝の夜離れや前渡りを用意するものである。『蜻蛉日記』にも通じる世界であるが、当時一夫多妻の下で、このような苦しみを味わう女性が多かったことは、筆者が事新しく述べるまでもない。「文散らし」の一件は、こうした当時特有の結婚形態の中から起こったものであり、それを背景としたこの贈答歌群も、そこでの男女異なった立場を考慮において初めて、その本質が理解できると思うのである。

注

- 1 本稿において『紫式部集』の本文は、新潮日本古典集成『紫式部日記・紫式部集』に拠った。その底本は古本系の陽明文庫本で、歌数は出首である。
- 2 『紫式部集の解釈と論考』（笠間書院81・11）
- 3 萩谷朴氏の説による。『紫式部日記全注釈』（角川書店73・3）下巻参照。
- 4 「尊卑分脈」によると、宣孝は藤原顕猷女、平季明女、藤原朝成女を妻としていた。
- 5 この一文は、31歌の左注であると同時に、32歌の詞書でもある。

